

荻生徂徠における「明德」の意味

——『大学章句』の「明德」との比較を中心に——

朴 倍 暎

本論文は、荻生徂徠（二六六六一—一七二八、以下徂徠）における「明德」という概念を『大学』、とりわけ朱子による『大学章句』の「明德」との比較を通して、徂徠思想の特徴をうかがうことをねらいとするものである。論の進め方としては、徂徠思想を特徴づける概念である「先王の道」と「明德」との関係を考察し、それに基づき「明德」という概念は『大学章句』だけでなく、徂徠の「道」論においても土台になる可能性について検討し、それにより、徂徠の「道」論をいわば原理論的な側面から考察することを目標とする。

一 『大学章句』における明德の意味

(1) 「三綱領」のなかの明德

では、徂徠の「明德」に入る前に、『大学章句』における「明

徳」とはどのような意味合いをもつ概念なのかについて考察してみたい。まず、朱子は「大学の道」について、次のような注釈をつけている。

明德とは、人の天より得る所にして、虚靈不昧、以て衆理を具へて、万事に應ずる者なり。但、氣稟の拘する所、人欲の蔽ふ所と為らば、則ち時有りて昏し。然れども其の本体の明は、則ち未だ嘗て息まざる者有り。故に学者当に其の発する所に因りて、遂に之を明かにし、以て其の初に復るべきなり。新とは其の旧きを革むるの謂なり。言ふところは、既に自ら其の明德を明かにすれば、又当に推して以て人に及ぼし、之をして亦以て其の旧染の汚を去らしむべし、となり。止とは、必ず是に至りては遷らざるの意。至善は、則ち事理の当然の極なり。言ふところは、明德を明かにすると民を新にす

るとは、皆当に至善の地に止まりて遷らざるべし、蓋し必ず其の以て夫の天理の極を尽くす有りて、一毫も人欲の私無し、となり。此の三者は、大学の綱領なり。

「大学の道」を理解する方法論として取り上げられた「明德」と「親（新）民」、そして「止至善」を朱子は『大学』の三綱領であると規定する。ここで、まず、「明德」についていうなら、天より授かるものであり、従つて、人間なら、誰もが持っているはず、ということになる。とはいふものの、実際の人間像というものが一様でないことはいふまでもない。ところが、朱子の論によると、そういった様々な現象はそれぞれの気稟の差によるものであつて、本来の姿ではない。そもそも人間は自分自身すでに「明德」に触れていることに気づいていない。逆に言えば、「明德」は人間が気づくか否かを問はず、あるべき場所に常に存在している。従つて、人間はその本来のところに向け、自分自身を回復させていかなければならない。それが『大学章句』における「明明徳」の意味であろう。そのようになるためには、今の「本来でない状況」は改められなければならない。「親民」をあえて「新民」と読みかえたのも、そうした「本来の所」への回復という熱望があつてのことであろう。

次に「新民」について考えてみたい。「新民」が意義をもつ理由は、それが主体の問題に関わるからであると思う。朱子に即して考えるなら、「新民」の対象には、人間全体、もしくは「人間

ならば誰もが」という意味合いが与えられていると考えて無理はない。

となると、「明德」に関する定義と「新民」に関する定義とは、その方向性において完全に一致する。つまり、『大学章句』を通じて朱子が打ち出そうとしたものは、人間全体を対象とするという範囲の確定であり、したがって、全ての人間が「明德」の主体または「新民」の対象になりうるということであつた。そのように、まず主体を確定した上で、次に論じられたのが「止至善」の問題である。

(2) 格物致知

朱子は『大学章句』の補伝のところで、次のようにいう。

曰く、所謂知を致すは物に格るに在りとは、吾の知を致さんと欲すれば、物に即きて其の理を窮むるに在るを言ふなり。蓋し人心の靈は、知有らざる莫くして、天下の物は、理有らざる莫し。唯だ理に於て未だ窮めざる有り、故に其の知尽くさざる有るなり。是を以て大学の始教は、必ず学ぶ者をして凡ての天下の物に即きて、其の已に知れるの理に因つて、益々之を窮め、以て其の極に至ることを求めざる莫からしむ。力を用ふるに久しくして、一旦豁然として貫通するに至れば、則ち衆物の表裏精粗知らざる無くして、吾が心の全体大用は、明かならざるは無し。

この「格物致知」をどのように理解すればよいだろうか。本稿

においては、この「格物致知」を「明德」との関係性の上で、考えていきたい。それは次のような論の展開となる。「本然の性」を回復するためには、いつてみれば「明德」に気づくことが肝要である。つまり「明德」の存在を知らなければならぬ。その「明德を知る」という行為、それがほかならぬ「格物」にあるということである。ならば、「致知」の対象は「明德を知ること」と理解してよいのではないだろうか。「格物」の意味はきわめて抽象的な概念で、さしあたり物に内在している理を窮めていくことと定義されるが、ここで重要なのはこの「格物」を徹底的に行ったところで、「致知」がもたらされるという順番的な論の構造である。それは「明德」の理解においても、そのまま応用できるというのも、「格物」を行うことにより、「明德」が人間に内在していることに気づくこととなるという図式が考えられるからである。

そのように、「格物」の結果、「明德を知る」準備ができる地点に至り、やがてその姿を保ち続ける。それが「止」の意味であると考えるのである。それができてはじめて「至善」にたどり着くことができる。

(3) 「至善」の完成態としての「矩の道」

朱子は「矩の道」について次のような注釈をつける。

老を老とすとは、所謂吾が老を老とするなり。興は、感発して興起する所有るを謂ふなり。孤とは、幼にして父無きの

称。矩は度るなり。矩は、方を為る所以なり。言ふところは、此の三者は、上行ひて下效ふこと、影響より捷く、所謂家齊ひて国治まる、となり。亦以て人心の同じき所にして、一夫の獲ざる有らしむる可からざるを見る可し。是を以て君子は必ず当に其の同じき所に因りて、推して以て物を度り、(中略) 則ち上下四方、均齊方正にして、天下平かなり。

朱子はある特定の対象に向かい、それに見合う、もしくはそれに相応しい感情がわき上がることを「矩の道」と捉え、それが国を治める根幹であると考えた。ここで注意を促す部分は、「人心の同じき所にして、一夫の獲ざる有らしむる可からざるを見る可し」という箇所である。朱子の論に即して考えるなら、そのような論の背景のもとで、所謂「明德を知る」準備状態が確保できることになる。しかしその段階は依然準備状態であって、まだ「至善」とは言い難い。ところが、この「準備状態」を経て「矩の道」に至って「至善」に到る。さらに、その「矩の道」の状態に至り、確実に止まる。それが、「止至善」の意味である。

(4) 『大学章句』における「明德」の意義

朱子は「明德を明かにすると民を新にすると、皆当に至善の地に止まりて遷らざるべし」といい、「明明徳」と「新民」、そして「止至善」との関係性について語った。その関係性とは「明德」が朱子学の人間論における「あるべきありよう」を問い続け

ていく上で、一つの出発点になることを指し示す理論的装置だった。『大学章句』においては、その「明德」の主体を明確にしようと試み、やがて主体をすべての人間と捉えた。それは、朱子学が個々の特殊としての主体ではなく、あくまでも普遍のうえに成り立つ主体を重視していたからである。朱子は「明德」という概念をもって、すべての人間に無限の権限とともに無限の責任を同時に与えようと試みたのであろう。

二 获生徂徠における「明德」の意味

一方、徂徠の思想を論ずるに当たって、「明德」を取り上げることは、いかなる意味があるだろうか。まず、徂徠は「明德」という言葉にさほど触れていない。また「明德」に言及したさいも、たとえば『大学章句』のような、いわば普遍論としては考えていない。そのような事情を踏まえつつも、なお徂徠における「明德」に言及する理由はどこにあるだろうか。それは以下の目的のためである。

まず、徂徠における最重要概念と思われる「聖人」を考察するにあたり、その「聖人」についてどのように考察すべきかという点である。徂徠は「道」について、「先王の道」という定義を下し、なおその「道」の根拠を聖人であると定めた。また、その「道」における聖人の営みを「礼楽」という「作為」に求めることによって、彼自身の「道」に関する論理を構築したのだが問題

はこの聖人の主体性である。本稿においては、この主体性に注目しその主体性を解く糸口として聖人と聖人ならざる民との関係性について言及したい。そのような論の提示は、「先王の道」を論ずるに当たって、より根本的な、いわば原理論といったものはいだろるかという問に帰するものである。本稿においては、そのような疑問を提出し、そうした「原理論」を「明德」に求めることにしたい。

(1) 徂徠における「道」と「明德」

そこで、徂徠における「道」を、「明德」との関連の上で考えてみたい。まず、「明德」について、徂徠は次のような定義を下す。

「明德」なる者は、君徳なり。左伝諸書稽ふべし。「明らかにす」とは、挙げてこれを明らかにするなり。磨きてこれを明らかにするの謂ひに非ざるなり。(『弁道』二四)

「明德」なる者は、顕徳なり。その徳著明にして、衆のみな見る所を謂ふなり。故に多くは以て在上の徳を称す。(中略) 孟僖子曰く、「聖人、明德ある者は、もし世に当らずんば、その後に必ず達人あらん」と。みんな汎く聖人の徳を称するのみ。必ずしも明の字に拘らず。然れどもまた、その徳顕明にして衆のみな知る所を以てこれを言ふ。(中略) 朱子の「虚霊不昧」は、心学を主とし、古のなき所なり。(『弁名』徳六) 徂徠にとっては稀にしか出てこない「明德」とは如何なる意味

をもつ言葉なのだろうか。まず、彼は、普遍的な意味合いをもつものとして考えてはならないと、断りながら「明德」を論じていく。彼は「明德」とは君主の顕徳であると規定する。そのさい、君主の顕徳は、聖人の徳に基づくものでなければならぬ。従って、徂徠における「明德」とは、言い換えると、聖人の徳ということになる。ならば、この聖人の徳の内容とはどのようなものなのか。徂徠は次のようにいう。

大抵、聖人の徳は、天地と相似たり。聖人の道は、含容广大にして、要は養ひてこれを成すに在り。まづその大なる者を立つれば、小なる者おのづから至る。後人の切迫の見は、みなその識る所の小なるが故なり。(『弁道』一一)

聖人の徳とは、もちろん聖人の道と連動して考えなければならぬものだが、しかし、聖人の徳がもつ、より重要な意義は、徳は聖人の道を道たらしめる、ということである。つまり、大きな流れとして聖人の徳が確固たるものとして立てられれば、その他、細かい事項はすべておのづから聖人の徳のなかに収まってくる。言い換えると、聖人の道に収まってくるということである。徂徠における「明德」はそのような意味合いをもつものである。

(2) 「人心の同じき所」と「性の近き所」

徂徠は人々の性は自ずと異なると考えた。性が異なるから、その性から出てくる徳は当然違いを見せる。しかし、人々の徳とは、ただ違いを見せるだけで、済まされるものではない。その違いは

「性の近き所」という箇所の説明に至って、より明確になる。徂徠はその「性の近き所」について次のようにいう。

いやしくも能く、先王の道、要は天下を安んずるに帰することを識りて、力を仁に用ひば、すなはち人おのおのその性の近き所に随ひて、以て道的一端を得ん(『弁道』七)

この「性の近き所」という言葉をどのように捉えるべきなのか。徂徠における「性」は各々違いを見せてはいるが、しかし、そうした「性」が意味を持つためには、「聖人」との関わりの上で語られる必要がある。徂徠における「性」の働きたは、端的にいえば、「聖人の明德」を仰ぐことである。つまり、聖人ならざる民が「聖人の明德」を仰ぎ、それにより、「聖人の道」が存在し続けるよう何らかの働きを成すことである。ところで、この「性の近き所」と朱子のいう「人心の同じき所」とは、どのように違うだろうか。朱子の「人心の同じき所」とは「本然の性」という概念が指し示すように、純粹な価値概念である。従って、「人心の同じき所」に悪がひそむ余地はない。そのような「所」を人間ならば、誰もが本来持っているはずというのが朱子の説明だった。ところが、徂徠における「性の近き所」はそうではない。次の引用をみてみよう。

「喜怒哀楽のいまだ発せざる」とは、その生るるの初、(中略)すでにこの徳あると謂ひて、以て人の性の能く先王の道と相応する所以の故を見すのみ。その不偏不倚にして聖人と

殊ならざるを謂ふに非ざるなり。(『弁名』中庸和衷三)

上記の引用文は徂徠の『中庸』における「未発」に関する解釈である。「未発」については徂徠自身、好んで取り上げる言葉でもなければ、朱子学的な色彩を帯びている言葉でもない。しかし、この「未発」という言葉を使うことで、彼の「性の近き所」はより明確にその意を顯すことになる。いわんとするところは、もし「未発」というありようがあるとすれば、それは先王の道に従う準備ができた状態を指し示す言葉であり、少なくともそうした状態を人々は持っているということである。そこで、この徂徠の「性の近き所」と朱子学の「人心の同じき所」との間には、根本的な違いを露呈することとなる。その違いとは何だったのだろうか。それは、後者においては「本然の性」を全員に与えることを全面に掲げることに対し、前者のほうは、全員に対し「全量」を与えようとはしない、ということである。なぜなら、性が違うだけにそれに従う徳も異なる。つまり、「持っている部分」は各々違う徳により、違いを見せずにはいられなかったからである。

三 おわりに

以上の考察から、徂徠の「明德」は『大学章句』の「明德」との比較を通じて、より明確なものになると思われる。『大学章句』においては、全員に「全量」が与えられることが目標とされた。しかし、徂徠においては、各々徳が異なるが故に、「全員に全量」

という発想はできない。つまり、人々は自身の徳の分だけ、あるいは自身の才の分だけ、聖人の明德を仰ぐことができればそれでよい、という結論につながるのである。

では、そうした結論から何がいえるだろうか。それは徂徠において聖人ならざる民を立てることは、聖人という概念を意識的に認識する主体の確立にはかならない、ということである。その主体性は聖人との「やりとり」により完成される。その「やりとり」とは徂徠のいう聖人の作為に還元され、さらにそのような「作為」には、聖人ならざる側の聖人に対する認識が必要となってくる。そうした「認識」形成の背景に「明德」が据えられていると考える。そのように、「明德」を主体性の確立に関する理論として捉えるならば、徂徠における明德の問題は、聖人に対して認識を立てる主体の問題として置きかえられ、それは徂徠思想における一つの原理をなす部分になりうるだろう。

(1) 『大学章句』の原文及び朱注の書き下し文については、『大学・中庸』赤塚忠、『新釈漢文大系』明治書院、一九六七、に従った。なお、旧字体は新字体に変えた。

(2) 荻生徂徠の『弁道』及び『弁名』については、『荻生徂徠』、『日本思想大系』岩波書店、一九七三、に従った。

(PARK, Baiyeong) 倫理学・日本倫理思想史

東京大学助教